５ 福井がめざす将来像

福井の置かれている厳しい現状を認識しつつ、「福井の優位性と可能性」を最大限に引き出し、これを活かしていくという視点を強く持って、この１０年間に実現をめざす福井の方向性、将来像を描きます。

「『希望ふくい』の創造」という基本理念の下、私たち福井県民は思いを共有しながら、実際の行動に移し、次に掲げる大きな２つの将来像の実現をめざし努力していきます。

福井がめざす将来像

（１）「縁を活かす」福井流生活の確立と継承

（２）「アジア交流ゾーン福井」の成長と未来への貢献

（１）「縁を活かす」福井流生活の確立と継承

①「つながりの力」による課題解決先進県

②「社会貢献層」として元気高齢者が活躍する健康長寿社会

③貢献心を持った「新しい私（わたくし）」が活躍する社会

④福井ゆかりのネットワークによる「ふるさと県民」百万人

①「つながりの力」による課題解決先進県

福井は、少ない失業、高い就職率、夫婦共働き、高い世帯収入など「経済的な豊かさ」、豊かな自然、広い持ち家、三世代同居・近居など「住み良さ」、健康長寿、高い学力・体力、ボランティア活動など「県民の資質・行動力の高さ」が、いずれも全国トップクラスの水準にあります。

県民意識調査（平成２２年６月実施）の結果によると、８割を超える県民が「福井に暮らしてきたことに満足感」を持っています。

福井においては、これまでも県民、企業、団体、行政などさまざまな主体が共に行動することによって、子育てや教育、結婚、高齢者の介護などを互いに応援し、支え合う仕組みをつくり、課題解決に挑戦してきました。このように、みんなで築き上げた豊かな生活環境が、私たちの今日の高い「生活満足度」につながっています。

グローバル化と少子・高齢化が進み、地域の絆が希薄になるにつれ、人びとの中に互いにつながりを求める気持ちが強くなっていることは、社会的な存在である人間として自然なことです。

この四半世紀、社会のために役立ちたいと思っている人びとの割合は、ほぼ一貫して増え続けています。今日では約７割にまで達しており、社会構造の変化に伴い私たち日本人の気持ちにも変化が表れています。

今こそ私たちは、「ふるさと福井」の歴史や良き伝統・文化の中で育まれてきた「つながりの力」を活かすときです。未来への「希望」を持ち行動を起こすことによって人と人との「つながり」を再構築し、新しい県民の生活スタイルをつくって今の豊かさを次の世代に引き継いでいきます。

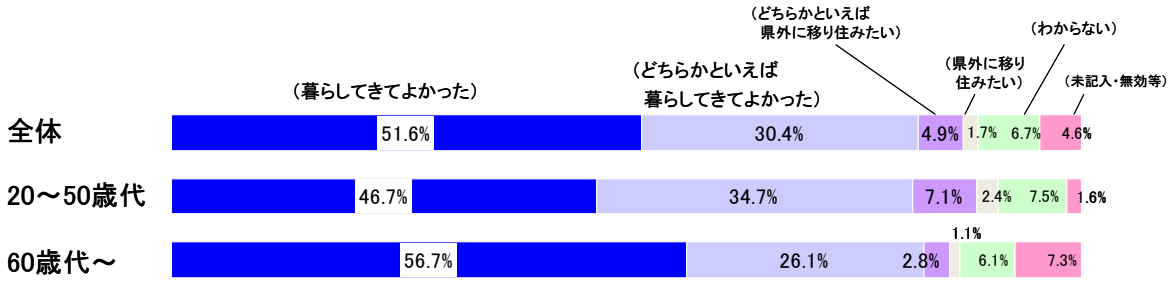
そのためには、グローバル化や人口減少・超高齢化が進む中、子育て、教育、雇用、結婚、医療・介護など直面するさまざまな課題を、一人ひとりの暮らしやライフステージに応じて最優先で解決していく必要があります。

福井の最大の強みである「つながりの力」を活かして、県民が一致協力し、こうした課題の解決のために全力を尽くします。

結婚や子育て世代の応援、誰もが「健康長寿」を全うするための健康づくりなどの県民運動や地域システムづくりを進め、課題解決の先進県をめざします。

福井に暮らしてきたことに対する県民の満足感

アンケート回答数：2501 件（回収率 50.02%）



出典：福井県「県政マーケティング調査」（平成22年6月）

〔データ解説〕
福井に暮らしてきたことに対する県民の思いを聞いたところ、「暮らしてきてよかった」と答えた人が 51.6%、「どちらかといえば暮らしてきてよかった」が 30.4%となっており、両方を合わせた「福井に暮らしてきたことに満足感」をもつ県民の割合は 82.0%となっています。

②「社会貢献層」として元気高齢者が活躍する健康長寿社会

人口減少・超高齢社会においては、県民が互いに助け合い、協力し合わなければならない場面が増えてきます。これは同時に、多くの県民が活躍できる場や機会が増えることでもあります。

１０年後、福井においては、６５歳以上の高齢者の割合（高齢化率）が３割を超えます。しかし、今日すでに６０歳代、７０歳代の世代は、健康を維持し元気に活動する「アクティブ・シニア層」です。

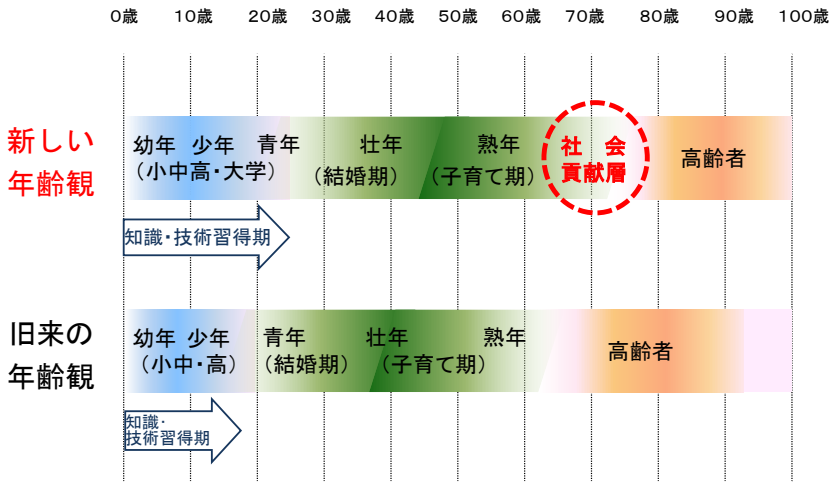
「健康長寿」日本一の福井だからこそ、これまでの「高齢者観」を根本的に転換することができます。福井においては、６０歳代、７０歳代を中心に健康で元気なシニア層を「社会貢献層」ととらえ直す新しい高齢者観を共有します。

これまでの年齢の区分から生まれる固定観念にとらわれることなく、県民一人ひとりが意欲や経験、体力に応じて地域や社会のために行動する動きをつくり出すことによって、年を老いても元気で生きがいを持って暮らし、活躍することのできる社会を実現します。

そのため、地域における活動やボランティア、自己啓発・学習などをおこなうことができるトータルなシステムをつくります。

このような新しい地域活力の仕組みをつくり、日本だけでなく、今後アジアにおいても急速に進む超高齢社会のモデルをめざします。

新しい年齢観と「社会貢献層」



③貢献心を持った「新しい私（わたくし）」が活躍する社会

他の人のために役立ちたいという抽象的な気持ちが、福井では、家庭菜園で育てた野菜をはじめ海・山・里・川の旬の味覚などを、となり近所や親戚、親しい仲間に届けるような、具体的な「おすそわけ」の文化として定着しています。

また、ロシアタンカー重油流出事故（平成９年１月）、福井豪雨災害（平成１６年７月）などの大きな事故や災害を経験し、私たち一人ひとりのボランティア精神は大きく育ちました。

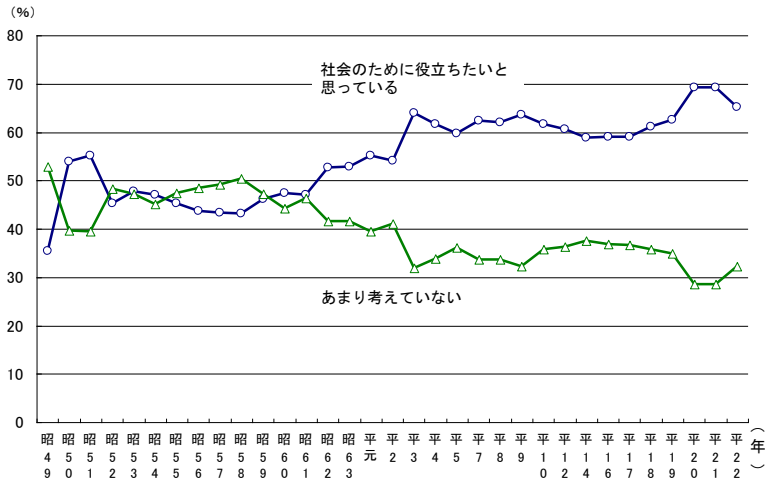
福井においては、こうした経験の積み重ねもあって、現在、災害時だけでなく日々の子育てや教育、地域の安全・安心のための活動が活発に行われています。

こうした良き伝統・文化、経験を活かし、他人や地域社会のために貢献したいという思いを持った「新しい私（わたくし）」が、「おすそわけ」のようにちょっとした「志」を交換・共有し、家庭や地域社会において「もう一役」を買って出る気風を育てます。

「新しい公（おおやけ）」は、財政状況が厳しくなる中、政府が国民に行政の一端を担う役割を求める考え方でした。一方、「新しい私（わたくし）」は、時代の転換期に生きる私たちが他者や社会のことを考え、自ら行動し貢献する、これからの個人の生き方を示すキーワードです。

県民一人ひとりが人的ネットワークを広げることによって、人を助け、人に認められることへの喜びと同時に、人に助けられることへの感謝の気持ちを実感できる社会をめざします。

社会貢献意識の推移



出典：内閣府「社会意識に関する世論調査」

④福井ゆかりのネットワークによる「ふるさと県民」百万人

高度成長期以来、東京、大阪などの大都市圏を中心に福井から転出した人は、推計で約８０万人にのぼります。転出者のうち半分が福井にＵターンしているとしても、全国には４０万人の福井人が生活をしていることになります。

県外への人口流出は、県内における活力低下の一つの要因ですが、見方を変えると、全国各地に４０万人の福井ゆかりの人びとがいるということです。家族を含めると、その数はさらに増えることになります。

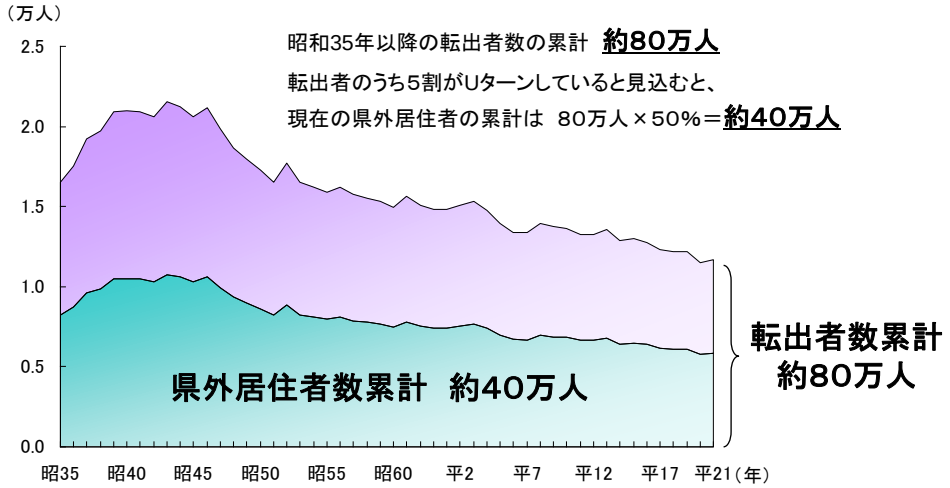
私たちは、人口の減少や転出を心配するだけでなく、開かれた発想で国内外にネットワークを広げ、県外から知恵やアイデアを取り入れ、力を合わせて地域の活力をつくり出す気概を持つことも必要です。

福井は、「ふるさとを応援したい」という人びとの思いを形にする「ふるさと納税」の仕組みを最初に提唱し、国の税制度として実現しました。また、「ふるさと納税情報センター」を独自に設置し、全国の先頭に立って「ふるさと納税」制度の普及と寄付の拡大を進めています。

また、全国の１１県が参加する「自立と分散で日本を変えるふるさと知事ネットワーク」を創設し、地方の新しい活力のあり方を共に考え、地方から日本を元気にする政策を提案しています。

これからも「ふるさと帰住」や「ふるさと起業」などの施策を進めるとともに、広い視野をもって県外在住の福井出身者、福井創業の企業、全国や世界の福井ファンの知恵やエネルギーを活かす県の外とのネットワークを強化し、「人口百万人規模の地域活力」を生み出していきます。

福井県からの転出者の推移と県外居住者推計



出典：総務省「住民基本台帳移動報告」

（２）「アジア交流ゾーン福井」の成長と未来への貢献

① 関西・中京などとアジアをつなぐ交流ゾーン
② グローバルな視野を持つ若者や企業人を輩出
③ 「ふくいの後継者」育成による商工業や農林水産業の発展
④ アジアの環境・エネルギー問題の解決に貢献

①関西・中京などとアジアをつなぐ交流ゾーン

福井は、関西・中京圏に近くアジアに開いた地理的特性、ものづくりやエネルギーに関する長年にわたる技術集積など歴史的特性を持っています。

こうした福井の強みを活かすことによって、私たちはアジアの活力を最大限に取り込み、アジアに貢献しながらアジアの発展とともに成長する道を歩んでいくことができます。

敦賀港は、平成２２年に国際ターミナルの整備を終え、国の「重点港湾」指定も受けました。官民共動のポートセールスを強め、コンテナ貨物取扱量も次第に増えつつあります。また、敦賀と関西圏を若狭湾岸経由で結ぶ舞鶴若狭自動車道も平成２６年度に全線が開通する予定となっており、嶺南地域から外に伸びる大動脈は５年以内に完成します。

さらには、奥越から長野、愛知など中部日本の各都市や首都圏につながる中部縦貫自動車道、北陸信越の各県を経由し首都圏に直結する北陸新幹線の整備を着実に進めることによって、大都市圏とのアクセスは格段に向上し、アジアと太平洋をつなぐ中心地として福井が成長するための基盤が整います。嶺南地域の新たな鉄道についても、新幹線の延伸や生活面、観光面の拡大を踏まえ、地元市町とともに引き続き検討を進める必要があります。

こうした港湾や高速交通ネットワークの完成・延伸を最大の好機ととらえ、観光など外に向けた働きかけを強めることによって、県内各地域の活力を最大限に高めていきます。

アジア各国・地域との間で「信頼」のパートナーシップを築き上げ、関西・中京経済圏とアジア経済圏とをつなぐ環日本海の「交流ゾーン」となって、ビジネスチャンスと人、モノの行き来（人流・物流）を飛躍的に拡大していきます。

②グローバルな視野を持つ若者や企業人を輩出

「粘り強い」、「勤勉でまじめ」と評される福井県民には、多様化する一人ひとりの価値観やライフスタイルを十分尊重しながら、力を結集して粘り強く街づくり、地域づくりを前進させる資質が備わっています。

かつて高度成長期の日本では、一生懸命働けば、それに応じて所得が伸び、みんなが明日に「希望」を持って頑張っていくことができました。

しかし、私たちは戦後６５年を経てグローバル化、人口の減少や高齢化という経済・社会構造が変わる時代の大きな転換点に立っています。多くの課題に直面する今日は、また多くのチャンスがある時代でもあります。課題をチャンスととらえ挑戦を行い、活力を生み出す「人材」の育成が最も大切です。

福井には、子どもたちの「学力・体力日本一」という教育の優れた基盤が整っています。全国の中でも、次の世代を担う「人づくり」について県民が一致協力して次のステップに挑戦できる最も近いポジションにあります。

「視点が短期的」、「外に対して閉鎖的」と言われる県民気質をあらため、「長期的な視点や目標を持って、外に開き積極的に働きかける」という姿勢を持ち行動することによって、将来を切り開いていくことができます。

「ふるさと福井」に誇りを持ち、グローバルな視野を持って幅広い分野で活躍できる人材、新しい分野にチャレンジする企業を数多く輩出していきます。

「アジアの中の福井」として、福井に本拠を置くグローバル人材、グローバル企業がアジア人脈を開拓し、活動のエリアをアジア中心に世界に広げていきます。その第一歩として、私たちの「志」を外に向け、互いに尊重し学び合う、現代における「魯迅（ろじん）・藤野厳九郎モデル」が築けるよう一丸となって努め、アジアをはじめ世界の人びとに頼られる福井人をめざします。

③「ふくいの後継者」育成による商工業や農林水産業の発展

アジアの国々の成長により、富裕層や中間層に属する人口が急増しています。これに伴い、アジア市場における消費者ニーズも大きく変化し、食品や日用品などに対する安全志向や高級志向、本物志向が強まっています。

福井には、全国的に見ても規模の大きな伝統的工芸品や繊維・眼鏡など高い技術力を有し生産を維持している「産地」が集積しています。

これからは、確かな技術力に支えられた優れた製品・商品が、アジア市場の中で求められる時代になります。福井の技術力とアジアのニーズを融合し、福井の「後継者ブランド」として育て、将来に継承していくことによって、大きな発展のチャンスが生まれます。

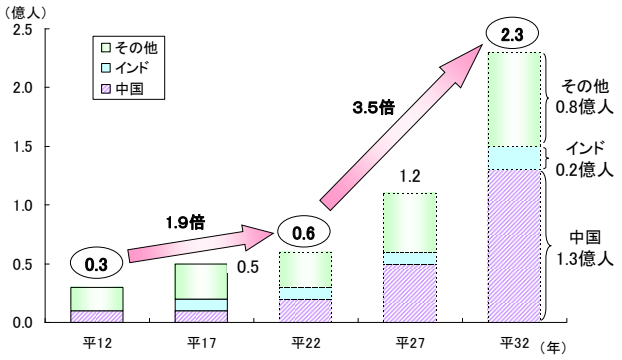
農林水産物についても、日本の商品の持つ品質と安全性に対する信頼の上に、福井のブランドとしての価値をつくり上げていくことによって、大きなマーケットを獲得できる可能性があります。

まず、ふるさとの先人から受け継いできた福井の優れた技術や能力、文化を次の世代に継承・発展させていくため、各分野の熟達者が師（先生）となって「ふくいの後継者」を育成します。

福井の若者が自らの技術や能力を継続的に磨く仕組みをつくり、商工業や農林水産業、伝統工芸、伝統文化の継承などさまざまな分野の「後継者」を育成することによって、福井の活力を生み出していきます。

福井産地の「後継者」が製品、商品、農林水産物などの付加価値を高め、国内外に向けて積極的にセールスする「後継者ブランド」の企業を積極的に応援する仕組みをつくっていきます。

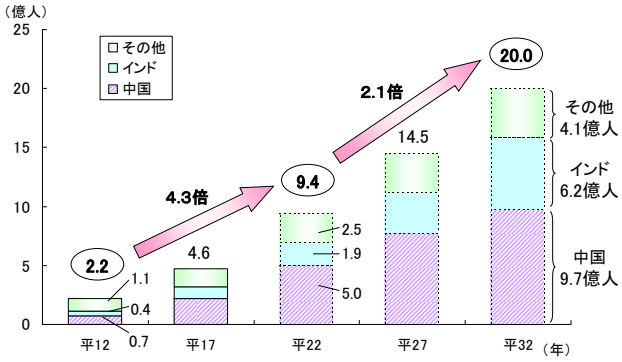
アジアの富裕層の推移



※1．世帯可処分所得の家計人口。アジアとは中国・香港・台湾・韓国・インド・インドネシア・タイ・ベトナム・シンガポール・マレーシア フィリピン
2．各所得層の家計比率×人口で算出
3．アジアの中間層とは、世帯年間可処分所得が35,000ドル以上の所得層

出典：経済産業省「通商白書2010」
（資料：Euromonitor International 2010）

アジアの中間層の推移



※1．世帯可処分所得の家計人口。アジアとは中国・香港・台湾・韓国・インド・インドネシア・タイ・ベトナム・シンガポール・マレーシア フィリピン
2．各所得層の家計比率×人口で算出
3．アジアの中間層とは、世帯年間可処分所得が5,000ドル以上35,000ドル未満の所得層

出典：経済産業省「通商白書2010」
（資料：Euromonitor International 2010）

④アジアの環境・エネルギー問題の解決に貢献

世界の人口はアジアを中心に今後も爆発的に増加し、また、世界経済もアジアを軸に成長していきます。その一方、エネルギーや食料の不足、地球温暖化などの環境問題、高齢化などの人口問題が、福井も巻き込みながら地球規模で深刻化していきます。

近年、３つの「Ｅ」(「経済の発展＝Economy」、「資源・エネルギー・食料の確保＝Energy」、「地球環境の保全＝Environment」）が、特に強調されています。

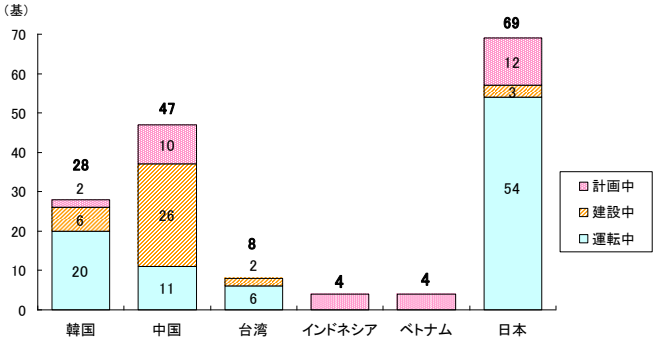
豊かな自然に恵まれ、「環境貢献度」の高い福井だからこそ、「経済の発展」に一方的に偏ったこれまでの考え方や行動を率先してあらため、この三つをバランスさせる新しい生活のスタイルをつくり上げていくことができます。

私たちは、アジアの国々の「成長の先にある課題」を解決するための模範を示し、アジアに貢献する姿勢を強く持って、これから先、直面するさまざまな課題を解決していきます。

第一に、環境・エネルギーの分野において、国や電力事業者、企業などと協力しながらアジア各国・地域との間で研究開発や人材育成のための地域協力の枠組みをつくり、国内外の環境・エネルギー問題の解決に向けて積極的に貢献します。また、私たちの日常生活において、二酸化炭素（CO_2）の排出をできるだけ抑える低炭素の街づくりを進め、地球環境問題にも貢献していきます。

第二に、海や山、里、川、水、動植物など福井の豊かな「自然資本」を未来に引き継ぐための活動を活発化させ、「環境と生活」、「環境と産業」を両立させるローカルの仕組みをつくり、国内だけでなく、経済成長が著しいアジアにおいて今後重視される環境保全のモデルを示します。

アジアの原子力発電所の現状



出典：（社）日本原子力産業協会「世界の原子力発電開発の動向 平成22年版」
※平成22年1月1日現在

〔データ解説〕
アジアでは現在、37 基の原子力発電所を新設しており、建設中のプラントは世界全体（66 基）の 56%を占めています。
また、アジアで計画中の発電所も 32 基あり、世界全体（74 基）の 43%を占めています。